

業績説明書(宮本百合)

- ① Miyamoto, Y., & Ma, X. (2011). Dampening or savoring positive emotions: A dialectical cultural script guides emotion regulation. *Emotion, 11*, 1346-1357.

人は一般に、ポジティブな感情を強く感じた際、その感情を抑制するよりも、それを維持し、高めようとするものだが、そのようにポジティブな感情を追求する程度には文化差があると考えられる。本研究では、「喜びすぎると何か悪いことが起きる」といったポジティブな感情についての両価的な文化的信念が東洋には存在することを示し、さらに、そのような両価的な文化的信念を持つために、東洋人は北米人よりもポジティブな感情を追求する傾向が弱く、ポジティブな感情が長続きしないことも示された。このような結果は、感情についての文化的信念が、感情制御や感情経験の文化差を生み出す一因になっていることを示している。

- ② Miyamoto, Y., Ma, X., & Wilken, B. (2017). Cultural variation in pro-positive versus balanced systems of emotions. *Current Opinion in Behavioral Sciences, 15*, 27-32.

人は一般に、「喜び」や「楽しみ」といったポジティブな感情を望ましいものと捉え、それらを追求しようとするのに対して、「悲しみ」や「不安」といったネガティブな感情を望ましくないものと捉え、それらを回避しようとするものと考えられている。しかし、そのようなポジティブ擁護・ネガティブ批判の感情システムは北米において特に顕著であるのに対して、陰陽思想のある東洋においてはより両価的な感情システムが存在することが示されてきた。本展望論文は、最新の研究の概観を通じて、感情についての文化的信念を基盤とした感情システムの文化差を理解するための理論的枠組みを提示している。

- ③ Miyamoto, Y., Boylan, J. M., Coe, C. L., Curhan, K., Levine, C. S., Markus, H. R., Park, J., Kitayama, S., Kawakami, N., Karasawa, M., Love, G. D., & Ryff, C. (2013). Negative emotions predict elevated interleukin-6 in the United States but not in Japan. *Brain, Behavior, and Immunity, 34*, 79-85.

北米での研究においては、日常生活においてネガティブな感情を感じている人ほど、免疫系の中でも炎症反応を促進する機能をもつインターロイキン-6 (IL-6) の値が高く、慢性的に炎症反応を起こした状態であることが示唆されてきた。慢性化した炎症反応は様々な病気につながる事が知られている。本研究では、ネガティブな感情が避けられている北米においてはネガティブな感情を感じている人ほど IL-6 の値が高いが、ネガティブな感情により受容的な日本においてはそのような関係は見られないことが示された。本研究は、バイオマーカーを用いて、感情が身体的健康へ与える影響に文化差がある可能性を示したパイオニア的な研究である。

- ④ Miyamoto, Y., & Wilken, B. (2010). Culturally contingent situated cognition: Influencing others fosters analytic perception in the U.S. but not in Japan. *Psychological Science*, 21, 1616-1622.

本研究では、米国のような相互独立的文化において他者に影響を与えるためには、他者や文脈に惑わされることなく、中心となる事物に注目する分析的認知が必要とされるのに対して、日本のような相互依存的文化において他者に影響を与えるためには、他者や文脈に注意を払う包括的認知が必要となるかについて検証した。米国では、他者に影響を与える役割に割り当てられた人は、他者に追従する役割に割り当てられた人よりも、分析的認知傾向を強めたが、日本では、割り当てられた役割にかかわらず、包括的認知傾向が見られた。上下関係という社会構造的要因が認知に与える影響は、より大きな文化的文脈によって異なることを示した先駆的な研究である。

- ⑤ Miyamoto, Y. (2017). Culture and social class. *Current Opinion in Psychology*, 18, 67-72.

本展望論文は文化心理学的視座から、社会階層が心理傾向や健康に与える影響について検証した研究を概観し、社会階層の影響には文化普遍的側面と文化依存的側面の両方があることを示唆した。例えば、日米共に社会階層の高い人ほど、自己表現を重視するなどの自己志向的な態度を持っている一方で、米国に比べて日本においては社会階層が高い人ほど、思いやりなどの他者志向的な態度も併せ持っている。社会階層の高い人は、どの文化でも自己志向の追求が可能であると同時に、文化的規範と合致した態度を持つ傾向があると言える。本展望論文は、社会階層と文化的文脈との相互作用を捉えるための重要な視座を提供するものとなると考えられる。